

15 田中彌性園蔵傷寒論の考証

田中 祐 尾

大阪八尾市・田中家彌性園文庫に伝わるとくに近世から明治までの大坂における医学がたどった遺産について、ここ数十年指に余る諸賢により分析研究がなされている。中でも古医書の鑑識については必ずしも系統的でなかったが、昨年北里研究所小曾戸洋らにより主に明(ミン)・渡来本の発掘がなされてその量と質が注目された。(九九回日本医史学会・函館)。今回この彌性園全古医書のうち、古来薬方の中核をなす種々の傷寒論(金匱要略を含む)について分析を試み存在の提起を行う。出典と分類については小曾戸洋・長浜善夫・岡西為人・中国医学研究院などの著書に拠った。

従来彌性園の蔵書の集積については、十八世紀初頭から大坂に台頭した商業の勢力に根差した町人階級の文化

が、中国や朝鮮の印刷技術の発達とも相俟って輸入本や翻刻本の流通を刺激した結果形成されたルートに沿って、当時の彌性園主七代元允(モトノブ)や八代元緝(モトツグ)が主に購入したものであるという考察がなされていた。現に平野含翠堂や懷徳堂の学者の書簡、木村兼葭堂からの直信など多くが残されており当時の先端の文化人との活発な交流が十分証明できる。一方今回対象とする数百冊の傷寒論をはじめ前述の明本などを吟味すると、その系統性と冊数そして保存の良好さなどからして、当時の一番の文庫の内容にも匹敵し地方の一村医の短期間での蒐集としては少々不自然さが残り、それが懸案でもあった。経済的な見地から見ると単純に計算して千両では賄えぬ資金の出所が不明のままであった。

今回は原本に対する発表者の識字読解力が脆弱で、各時代の傷寒論に独特の修飾や編纂の内容についての言及はし難い。しかしながら時代別連続性と正統性、印刷技術と紙質、版元の信憑性など、江戸初期あるいはそれ以前からの蒐集がすでになされていたとの考察が可能となった。即ち古いものの入手時期の時代背景そして流通経

路の解明が必須であろうと考えた。

田中家由緒書によると、天正十三年二月五日に大和国主となった豊臣秀長が三輪明神参拝の砌、大神主の次男大神(オオミワ)基則という者を召し抱え大和郡山田中村に千石で封じたとある。三輪神官の系譜をたどると、この時期大神主高宮家系で保房という人物がこれに相当し神主を世襲していない。父の益房は大神主で従兄弟に三位法印良房がいる。この良房が三好一路といって豊臣秀吉の姉日秀の夫であり秀次、秀勝、秀保の三人の男子を設け、三男の秀保が甥養子として大納言秀長に迎えられ秀長の死後五年間大和郡山城主となる。豊臣秀保と大神基則(高宮保房)とは従兄弟の子同士ということになり、仕官と同時に秀長により郡山城の出城としての田中村の環濠集落を与えられ以後田中基則と名乗った。

神社勢力に蓄積された「神宮醫方」については久志本常孝の著書に詳しいが、三輪明神に伝わる神方も独特のもので古くから醸造の神としても知られる。大神基則もこの神方の継承者で封祿後郡山藩の典医として活躍した。史実によれば秀吉の晩年は飽くなき権力と財力にも

のを言わせた医師、薬石そして医学書の徴収蒐集に貪欲な日々であった。天正十九年四天王寺に施薬院を再興し死ぬまで医学の充実を命じた。文祿の役には大阪城で軍医三百人を閲兵、秀保は肥前名護屋に大和郡山の医師数十人を招集した。これらの医学関連事件に豊臣政権絶頂期の大蔵大臣であった秀長とその嗣子秀保が関わり、その典医田中基則らが権力と財力のラインに乗って実行団の最先鋒であった可能性が高い。豊臣勢力の医学文庫にあったはずの医書籍の数々がなぜ河内の寒村に伝わったかについて説明の紙幅がないが、地方の一家系にその後四百数十年連綿と伝わった稀に見るその内容について、本邦医学の道程を辿る具体的一指標として一層の解明が必要と考える。

(大阪市立大学医学部)